

禅林における「送行詩」と「招寄詩」について

——「雪岫朔公諸彦送行詩軸」（南禅寺所蔵）を中心に——

朝 倉 尚

はじめに

本朝禅僧の作品（集）には、禅林において半ば儀礼的に製される種類の作品が存在する。本稿でその実態を明らかにしようとする「送行詩」や「招寄詩」もこれに該当する。

禅僧が多様な目的で他地に赴く際に、見送る側の僧が餞の意を込めて贈るのを「送行詩」と総称する。稀少ではあるが、見送られる側の僧が作品を残す場合があるが、これは「留別詩」と称される。一方、他地における留滞が長期にわたるために、音信代わりに詩を寄せ、特別に早期の還帰を促す性質を有した作品を「招寄詩」と総称する。「送行詩」（含、留別詩）や「招寄詩」の特徴は、しばしば詩を贈られる当人（留別詩の場合）やその師僧・同塔頭内衆と、親交や縁故を有する有志の僧・同社の社友が挙って唱和することにある。文学結社の一つの活動としても位置付けることができる。作品は、

詩軸として残されることもあったし、また、各禅僧の作品集にも収載されている。後者の場合には、類似の題詞が付されることとなり、これらを比較することにより、同時に製された作品であることが判明することも少くない。

「送行詩」とは、ここでは一般的な意味での、旅行者を送る・旅する僧を送る詩を指す。禅林では、僧・雲水が行脚に出るのを送るのに対して、送行そうぎんと呼ぶ。送行詩の中には、送行の詩も含まれる。送行詩は、禅僧の作品集には「送（僧名・目的地）詩」型の題詞を付して収載されることが多い。「餞はなむけの詩」「餞詩」「送人詩」「送別詩」などと称呼することも可能であった。分類本の形態を採る総集について見ると、本朝禅僧が中国詩人の詩を集めて編纂した「詩の総集」の代表として知られる、「新選集」「新編集」「錦繡段」「続錦繡段」ではいずれもその部門名の一つを「送別」と称している。一方、義堂周信が編纂した中国禅僧の「偈頌の総集」として

知られる、「新撰貞和分類古今尊宿偈頌集」「重刊貞和類聚祖苑聯芳集」では部門名の一つを「送行」とし、以心崇伝が編纂した本朝禅僧の「詩の総集」である、「翰林五鳳集」では部門名の一つを「送行部分」とする。

現存する送行詩の場合、京都五山の禅寺から、地方の郷寺へ帰省する僧、地方豪族に招請されて下向する僧、景勝地に遊ぶ僧等に対して、餞として贈られることが多い。

送行詩に対し、送られる側の僧が残した作品が「留別詩」である。留別詩について、例えば「四河入海」の留別項に、次の説明がある（句読点・中点）。

留別ト云ハ送別・贈別トハ別ナリ。留別ト云ハ、他處へ行く人カ、詩ヲ作テ置テイクヲ云フ。

現存する作品は稀少であり、送行詩に付随して取り上げ、検討を加える。

「招寄詩」とは、他地に留滞する人・僧に対して、此地に招請することを目的として、音信代わりに寄せる詩を指す。招寄詩は、禅僧の作品集には「招（僧名・留滞地）詩」型の題詞か、「寄（僧名・留滞地）詩」型の題詞を付して収載されることが多い。「寄（僧名・留滞地）詩」型の作品については、元来は音信を寄せてお互いの消息を交わすことを目的としたものであるが、他郷に滞在する僧に対する音信は、ともすれば帰還（寺）を勧めることにもなるのである。そこで、詩の内容

からは、「招（僧名・留滞地）詩」型の題詞を付した作品と、区別し難いものが多い。それぞれを「招人詩」と「寄人詩」とに区別して呼称することも可能であるが、本稿では「招寄詩」と総称する。因みに、「新選集」「新編集」では「簡寄^{答贈}」、「錦繡段」「統錦繡段」では「簡寄」、「新撰貞和分類古今尊宿偈頌集」では「簡寄」、「重刊貞和類聚祖苑聯芳集」では「簡寄」「懷友」「招友」などの部門を設けている。「翰林五鳳集」にいたり、「招寄分韻部」と称呼、分類される。

現存する招寄詩の場合、京都五山の禅寺から、地方の郷寺・豪族・景勝地に滞在する僧に対して、早期の還帰を促して贈られることが多い。そして、その際の特徴の一つを、例えば「中華若木詩抄」の156江西「寄越人」題の抄文に、

越人ハ、友竹節侍者ト云人ゾ。越前テ門地モサル人カ、又ハ、勝^ヲレタル美人乎。五山ノ諸尊宿ヨリ詩ヲ作りテ寄ルゾ。暫時里下リト見ヘタル也。村菴ナンドモコノ詩ヲ作ラレタル也

のように解説している。五山の諸尊宿が詩を製して寄せた對手僧は、門地（家柄）、あるいは容貌・才能の卓越した幼童・少年僧であることが多かった。なお、友竹侍者を、俗人とも解される「越人」と表記するのは、本詩の収集源が作品集の類ではなく、各詩の題辭を欠いた詩軸の類であったことを示すと推される（現存の江西の作品集に未所収）。「村菴ナンドモ（下

略」と特記される希世の同時詩としては、永享十年（一四三八）に製された『村庵藁』所収「寄友竹節侍者」詩・『雪巢集』所収「寄越上友竹侍者」詩を指すであらう。

送行詩と招寄詩の性格や特徴について概説した。そもそもは彼地・中国における詩作を内容によって分類した折の部門（名）に起源する。これが本朝禅林に齎され普及した結果、半ば儀礼化して定着したものである。ついでには、移入・普及の段階より順を追ってその実態を説明するのが正統であらう。が、以下では、むしろ半ば儀礼的な慣行として定着している、室町時代後期の状況について検討し、禅僧の作品や作品集が具備する特質の一端として提示したい。

主論 「雪岫朔公諸彦送行詩軸」（南禅寺所蔵）について

京都南禅寺に一詩軸が所蔵される。「五山文学新集」別巻一 所収の「詩軸集成」において、軸の内容が翻刻・紹介されている。軸上の詩と文は、京都五山の諸老が、雪岫朔公に宛てたものであり、軸の呼称「雪岫朔公諸彦送行詩軸」は、編者・玉村竹二氏の仮の命名である。序・跋文二編、詩一六首より成る。

この「雪岫朔公諸彦送行詩軸」を特別に取り上げるのは、現存する詩軸の中でも、送行詩・招寄詩を内容とするからである。そもそも、集められた送行詩や招寄詩は、最終的には宛てられた僧の許に届けられることになるが、その際に詩軸として軸装されるのが望ましかったようである。個々の作者の詩作のみならず、それらの前後に序文と跋文が付され、それぞれ作者が軸上に作品を染筆筆写、署名、捺印するのが意を尽くした本格的な儀礼とされた。当「雪岫朔公諸彦送行詩軸」は、それらの要件のすべてを具備した、典型的な詩軸と言える。詩軸の作成を企てた主唱者、あるいは仲介者は、予め作詩（文）を依頼した上で、時を改めて各作者の間を順次軸を持参して着詩（文）を乞うことになる。費される労力は長大であるが、それだけに詩軸を贈られる僧ともども、禅林の名誉の風雅事として喧伝されることにもなるのである。

【序文の検討】

「雪岫朔公諸彦送行詩軸」において、詩軸作成の背景や経緯を説明するのは、序文である。少しく長文であるが、詩軸の序文としての特徴をよく發揮した、達意の文章であるので、全文を引用して説明を加える。引用に際しては、原蹟で用いる古字・俗字・略字・旧字等を、大略通行の字体に改めた。前掲「五山文学新集」別巻一 所収の「詩軸集成」をも参照されたい。同時に、同書の当軸に対する玉村氏の解説は、軸の性

格と背景を記述される。筆者の以下の論も、その学恩を蒙っている。

序文は、便宜的ではあるが、前・後の二段落に分けて示す。前半部は次のごとくである。

関南第一古禪林曰鷲峰、法灯開基、三光統焰以来、名緇世出。海山奇勝冠天下、遊錫不絶、不造厥地者、非是僧也。前南禪伯嚴大宗主、方旺化于彼。小師竜峯佳少年雪岫朔公、宝徳三禪辛未之夏、将往侍絳帳焉。同社諸賢、無老幼、襍然欄路晚望、惜其别。逮既去、欲其速来帰、言之不足、寓情於詩、以贈焉。輯成一巨軸、介于慈氏抱節老師、徵序于予。々辞曰、人之降竜門而来亀阜者、咸称雪岫之美、不容口。其必有過人之行、是其難為言者也。矧復操椽筆摛華藻者、鱗萃於山中。庸置吾喙於其間哉。

冒頭に取り上げるのは、軸が宛てられる雪岫の目的地・留滞地である。紀伊国由良の鷲峰山興国寺の概要が記され、称揚されている。興国寺は臨濟宗法灯派の本拠であり、派祖無本覚心(法灯円明国師)が開基し、孤峰覚明(三光国清国師)をはじめとする高僧を輩出した。当地は景勝の地としても知られ、諸僧・雲水の遊錫が絶えなかった。

詩軸が作成されるそもその契機や動機が、これに次いで述べられる。時の興国寺の住持は南禅寺に前住した伯嚴殊楞であり、この伯嚴の中瓶に親しく随侍するために下向するの

が、南禅寺(竜)の禅栖院に留まっていた弟子(小)の「雪岫朔公」であった。禅栖院は聖徒明麟が開創した塔頭であり、南禅寺内における法灯派(由良派とも)の拠点の一つであった。雪岫朔公は、道号が雪岫、法諱は靈朔である。この間の法系を図示すると、



となる。雪岫靈朔は「佳少年」であったと形容されるが、「佳少年」の表現自体は類型的である。雪岫の興国寺行は宝徳三年(一四五二)夏のことであった。「同社」の諸友は、老幼を問わず、別離を惜しみ、速やかなる還帰を願ったが、ただに口で言うだけでは足らず、その心情を詩に寓して贈ったとする。規模が大きくなればなるほどに緩やかな規制にならざるを得ないが、目的を一つにした文学結社のことを「同社」や「友社」と称している。

序文の依頼と、当初の辞退の弁を載せている。送行詩や招寄詩の詩軸の作成の場合は、宛てられた当人は原則として目的地・留滞地に滞在しており、集詩をはじめとして、序文・跋文の依頼については、これを強力に推進する主唱者・仲介

者が必要であつた。当詩軸の場合には、「慈氏抱節老師」とある、南禅寺慈氏院の塔主・抱節中孫であつた。慈氏院は義堂周信の開創で、南禅寺内における夢窓派の拠点の一つであつた。抱節は、夢窓疎石―義堂周信―大椿周亨―抱節と相承し、異門派ながら同寺内に居住しており、特に伯嚴が興国寺に先行後において、雪岫を後見・庇護したものであろう。序文を依頼される「予」については、後掲の署名により、竺雲等連を指す。竺雲は、夢窓派では黙翁妙誠を祖とする華藏門派に属したが、南禅寺にも住持しており、法灯派に親近したことは自らが後述するところである。竺雲は、抱節より依頼される序文作製のことを、一度は辞退している。南禅寺(門)を訪れた後に天竜寺(地)にやって来る人(僧)が、それぞれ皆雪岫の美を称揚して止まず、さらに口筆することを許さないというのが第一の理由である。次いで、そもそも別離送行に際しては、なかなか自らの心情を言(詩)に尽くし難いものである。ましてや堂々たる文章(筆)や美しく飾られた文章(筆)が製されて、山中より群がり集まるに相違なく、どうしてその間に自らの余計な口出しをすることができようかというのが第二の理由である。

辞退の第一の理由に關連しては、跋文においては、
比者竜峰有一幼齡佳子。朔其名、雪岫其字、盖孜孜善之徒乎。雖予幸卜比隣、年不相若、道不相似。唯道途之遇、秦

越之視而已。然而同人之往來口談、靡不稱厥美者。

と述べている。留意されるべきは、序文において「佳少年」と形容された雪岫は、右の跋文では「一幼齡佳子」として紹介されることである。年齢的に幼少であることが強調された形容になつてゐる。雪岫は、いまだ剃髮出家を果たす以前の、有髪の童僧である「喝食」であつたと推される。寺内では近隣に居住しながら、年齢的にも、学道の上からも遠く隔たりがあつたために親密ではなく、ただ道の途次において遠く隔て眺めやるに過ぎなかつた。跋文の作者である景南英文は、寺内に東禅院を開創して居したが、宝徳三年時には八七歳であつた。一方、景南はそれとして、雪岫の「往來口談」に接した者は、「厥の美なるを称せざる者靡し」であつたとする。往來における容姿、談話における仕種を称美しない者は無かつたと記述している。前の「中華若木詩抄」が掲げる範疇で言えば、雪岫の場合には「勝レタル美人乎」に属し、「美人」についてもいわゆる容貌・容姿の勝れた人(僧)を指しているよう。ただし、景南も

令師迺前南禅不白殘翁、於予非不相識。但薰陶無日、其潛之密之家法、豈易伺耶。今覩此兒、無乃深山大沢乎。其義方訓練之精勵者、得知之。所謂因弟子益知師之德高且大者乎。

と述べ、「深山大沢乎」とし、以下、將來の大成を期して激励

することを忘れてはいない。なお、東禪院と禪栖院とは近隣であつたためか、雪岫の師の伯巖(不白)（不白）とは相識の間柄であつた。跋文が依頼された因由の一つであらう。

辞退の第二の理由は、美辞を連ねた表現ながら、内容は類型的である。一旦は辞退する際の、常套的な言辭として理解される。その中で留意されるのは、「鱗萃於山中」における「山中」である。「一山中」のことで、瑞竜山中、すなわち南禪寺のことを指すのであらう。詩軸作成のための集詩の対象とされたのが、南禪寺一山より選選られた文筆僧であつたと解される。ことが美貌の幼童に宛てられる詩軸作成であることから、あまりに仰々しい規模で集詩されることも、かえつて鑿鑿を買う結果を招く恐れがあつたであらう。自制が働いていたことは確実であらう。が、後掲のごとく、集詩に応じた文筆僧の多くが、平素は他山・他寺に住する僧である。そこで、序文では、「一山の友社」から集詩されたように記述されるながら、少くとも後世の読者・鑑賞者にとつては、五山・禪林全体の文筆僧を対象にした「五山の友社」から集詩された詩軸のように映ずることになる。その原因は、南禪寺が典型的な「十方刹（十方住持制）」であり、したがつて寺内に五山派に属する多くの門派が拠点とする塔頭を創建したことにある。南禪寺（五山之上の寺格）には五山の寺格の住持を経験した東堂位の和尚・長老が昇住するほか、一時的に寺裡の自

派の塔頭に止住する多くの僧があつた。南禪寺一山に因縁の深い僧から集詩された場合、結果的には「五山の友社」からの集詩に類似する所以である。

序文の後半部は次のごとくである。

于再于三、澹請不已。予乃自謂曰、昔耕雲師之棲于如住也、厠影於講席、非一壺一夕之雅也。江漢以濯之、秋陽以暴之、音容雖邈而微言之緒、淪于骨髓者深矣。然則彼與我、豈不為通家虜。予竊觀今之鼓林、雛道作阡陌。或夸以氏族、或威以勢援。綵繪而服之、帷張「帳」而居之、踐地怕痛、若婦人処女然。今也、童子而南詢、謁師拜祖、其志凜乎。南紀之人觀之、則不覺膝之屈加手於額、必曰、善財再出於五濁之區坎。笕城子免冠、進曰、請書斯語、以塞其命焉。兼贊一小詩于楮尾。

迢々千里趣行裝、海國諸峯生夜涼、童子南詢拜稽首、壇中湧出法燈光、

昔辛未仲夏吉辰、前南禪竺雲等連 囑

書于西阜之華藏東欄

抱節の再三にわたる要請のはてに、竺雲が翻意した因由を述べている。竺雲は、往時において、花山院家の家刹である東山如住院に隠棲した子晋明魏(耕雲)の講席に連なり、親近するには至っていないが、遙かながらその音容に接している。その人格の高潔を孔子（曾子とも）にも比されている子晋

は、俗名は花山院長親、南朝の廷臣であった。南北朝の合一によって致仕、やがて禪栖院の聖徒明麟の許で出家・嗣法する（前賢）。すでに永享元年（一四二九）の死去であるが、伯巖にとつては師兄、雪岫にとつては師叔に相当する。竺雲は、法系は異なるが、学統の上からは門生（弟子）であることを表明し、ここに彼の伯巖・雪岫と、私の竺雲とが互いに親交・親類の家柄であることを特記する。

次いでは、喝食行者をはじめとする雑僧が愛寵される禪林の風潮を慨歎し、これに一石を投ずるかに見える雪岫の興国寺行を称揚する。竺雲が描写するところは、剃髮前の幼童・喝食、さらには少年僧が、禪林内を縦横に往来し、我が出自の家柄・権勢を誇り、服飾・居室に贅を凝らし、あたかも「婦人処女然」として立居振舞する現状に及んでいる。これらは、応仁の大乱より復興後の禪林が、一方では東山文化を支える原動力として評価されながら、肝心要の宗旨工夫の面では衰頹・墮落が指摘される際の状況と一致している。乱前においてすでに、「中華若木詩抄」の言う「門地モサル人カ、又ハ、勝レタル美人乎」が愛寵されたことが事実であり、文学作品・艶詩の素材として利用されながらも、同時に、一部の求道僧にとつてはその言行・举止が眼に余る存在であったことが知られる。雪岫も外見はそのような存在の一人であるかに見えるが、内実において、この興国寺行こそは純粹な宗教

心から発したものであるとして称揚する。竺雲は、雪岫を善財童子の再来として、師・祖の許への歴訪を「南詢」に比している。「南詢」の語は、善財童子が南方五十三人の善知識を訪れて道を尋ねることを指し、転じて問法行脚の意に用いる。今や、雪岫は童子にして南方興国寺に向けて行脚し、師である伯巖に謁し、祖である無本の塔・像を拝し、家法の深奥を問わんとする、その志たるや稟乎として、勇猛心の表出にほかならない。南紀の国人は雪岫を見て思わず跪いて手を額に当てて礼拝し、必ずや「善財童子がこの五濁の悪世の境界に再来されたか」と唱えるにちがいない。悪弊の風に乗じたかに見える艶詩の詩軸作成を、実は問法行脚の壮行事であるとして、雪岫を激励し、大成を期している点が眼目である。

末尾に一詩を添え、署名・捺印する。詩は七言絶句詩で、序文をも踏まえ、転句に善財童子の南詢を詠出して雪岫の問法行脚を比し、結句には「法灯」語を、法の灯火の意と雪岫の属した法灯派の意をも示す機縁語として用いている。序文・詩が軸上に染筆筆録されたのは宝徳三年（一四五二）五月吉日のことであり、時に竺雲は南禪寺の前住として西山・嵯峨の諸庵の一つ華藏院の塔主であった。

以上、竺雲の序文は、詩軸作成の背景や経緯を比較的细节に説明する。竺雲の序文と詩は、詩軸の冒頭に筆録され、以下に収載される詩作の内容・性格を端的に示すことになる。

各詩の作者にとつては、作品を製する上での指針であつたと推される。かくして、宝徳三年の夏五月より、順次詩作が軸上に筆録されることになるのである。

「雪岫朔公諸彦送行詩軸」の作成は、跋文を軸上に染筆筆録することによつて完結したようである。その景南の跋文の末尾には、「享徳改元八月 日、景南叟英文、暮齡八十八書焉」と署名され、捺印されている。跋文が筆録されたのは、序文が筆録された翌年の享徳元年（一四五二）仲秋八月のことである。一年以上が経過していることになる。この間の経緯について、景南は跋文中において

辛未之夏、抱節翁、把此編軸、抵予請序于後、予笑而辞曰、平日不從事于斯、申以老悖、即卷還之、請者數焉、辞者數焉、因循于今、竊喜無復請焉、踰季之稔、來請益切迫而曰、必為之、其名師之雄文也、諸老之盛作也、抱翁命之重也、惟予之所以不獲已也、

と記している。依頼者はやはり抱節で、しかも序文と同様に宝徳三年夏のことであつた。抱節は、詩軸の全体像・構成を漠然とは予定し、関係者の全員に前もつて知らせて、諒解を得ようとしたものと推測する。ただし、景南は当初、巻軸を持參して跋文の製作・染筆を要請した抱節に対して、「老悖」（悖は、はけるの意）を理由に軸を巻いて返還したとする。秋季に製された詩作も認められ、いまだ染筆・筆録はその緒に就いたばかり

りであり、白紙・空白の部分も多かつたことが知られる。次いで、進捗の状況をも示しながら、数次にわたり抱節の要請と、景南の辞退がくり返されている。景南の年齢から推して、南禅寺中の文筆僧の中で最長老であつたことが想像され、それだけに、跋文の作者を改めて他僧に依頼することは困難であつたらう。他方、老齡を理由に辞退されたのでは、抱節としては無理に強いることは遠慮される。そこで、跋文を除いたすべての作品が筆録され、あるいは雪岫の帰洛が目前に迫るといった切迫した状況下で、少しく静観していた抱節は一気に染筆筆録を強要したかのごとくである。

【詩軸の構成】

「雪岫朔公諸彦送行詩軸」を構成する作品の作者を中心に、一覧表を作成する。「南禅寺の名宝」（南禅寺。昭58）所載の図版と解説に拠ると、一幅は「贈雪岫朔公詩軸」と称呼され、縦一三八・七糎×横三五・九糎である。縦に長い紙幅を六段に分け、最上段・第一段に序文、最下段・第六段に跋文、この間の第二段から第五段に一五僧の一五詩が筆録されている。詩軸に関与した僧は、全員が伯巖—雪岫の師資と何らかの因縁を有する、広義の南禅寺僧であつた筈である。が、前述のごとく、南禅寺が十方刹（十方住持制）であつたために、このことの理解が容易ではない。「宗派」欄と「備考」欄の中の平素の居住塔頭・寮舎名を示す記事とが、この間の実情を端

僧名	別号	宗派	備考	住持
雪融靈朔	不白殘翁	臨・法灯派孤峰下	紀伊国由良の興国寺に下向。南禅寺禅栖院	南 ¹⁴⁷
伯蘇殊楞		臨・法灯派孤峰下	興国寺住持。南禅寺禅栖院	万・相・南 ¹⁵⁵
竺室等連	玉泉橋北	臨・夢窓派華嚴門派	序文・1詩。時に華嚴院塔主、次いで鹿苑院主。——一四七一	東・南 ¹⁴⁵
愚極札才	宗鏡懶衲	臨・聖一派	2詩。東福寺曹源院。——一四五二	東・天・南 ¹⁵⁶
信仲明篤	謙斎老衲	臨・聖一派水明門派	3詩。東福寺水明院宗鏡軒。——一四五一	建・南 ¹⁶¹
心田清播	茨菘老人	臨・夢窓派慈氏門派	4詩。建仁寺大統院	南 ¹⁷⁸
抱節中孫	雪果交	臨・夢窓派慈濟門派	5詩。主唱・仲介役。序・跋文の依頼。南禅寺慈氏院	相・天・南 ¹⁸⁵
東岳澄听	臥雲猿僧	臨・夢窓派大慈門派	6詩。一條釋詞の息男。嵯峨知足軒ほか。——一四六三	建・相
瑞溪周鳳	鷗郷散人	臨・夢窓派大慈門派	7詩。相国寺慶雲院北福軒。——一四七三	建
東沼周殿	良岑	臨・法灯派孤峰下	8詩。建仁寺大統院嘉徳軒・栖芳軒。——一四六二	建
菊畹疊種	若耶樵子	曹・宏智派	9詩。	建
文溪聖才	稻菴	臨・黄竜派寂庵下	10詩。	建
瑞巖竟惶	逍遙叟	臨・聖一派本成門派	11詩。建仁寺靈泉院。——一四六〇	東・南 ¹⁸⁶
存耕祖黙	樵隠子	臨・聖一派本成門派	12詩。東福寺正印庵。——一四六七	東・南 ¹⁹³
華岳建胃	葵斎	臨・黄竜派寂庵下	13詩。東福寺常喜庵。——一四七〇	相
九淵竜踪	紫蓬山人	臨・夢窓派華嚴門派	14詩。建仁寺知足院・靈泉院。——一四七四	建・南 ²⁰²
竹香全梧	村庵	臨・大鑑派	15詩。相国寺慧林院	万・南 ¹³²
希世靈彦		臨・聖一派桂昌門派	16詩。東山岩栖院、南禅寺聴松院。——一四八八	
景南英文			跋文。南禅寺東禅院。——一四五四	

(注) 1、「別号」欄は、主として当該作品における自署に拠つた。

2、「宗派」欄の「臨」は臨濟宗、「曹」は曹洞宗である。玉村竹二「五山禅林宗派図」(思文閣出版、昭60)を参照した。

3、「備考」欄については、詩軸との関連、主として居住した塔頭・寮寮名、没年(西暦など)について記した。玉村竹二「五山禅僧伝記集成」(講談社、昭58)を参照した。

4、「住持」欄には、五山の寺格の諸寺への住持歴を略号で示した。「万」は万寿寺、「東」は東福寺、「建」は建仁寺、「相」は相国寺、「天」は天竜寺、「南」は南禅寺である。南禅寺住持については、その世代を帝國図書館旧蔵本「五山歴代」(東京大学史料編纂所蔵・謄写本)により示した。

的に示している。作品を詠進した一七僧の所属が、多様であるのが特徴である。「宗派」欄について言えば、曹洞宗下の僧が一員含まれる。文溪聖才の曹洞宗宏智派である。ただし、例外的に見えながらも、この派の僧は五山の官寺制度の中に組込まれ、五山派の諸寺に出世・昇住している。臨済宗下の一六僧の中では、夢窓派の七僧、聖一派の五僧、黄竜派の二僧と続いている。さらに、法灯派からは雪岫の法兄に当たる菊畹曇種、大鑑派からは希世靈彦が選ばれている。「備考」欄に示した平素の居住塔頭・寮舎については、南禅寺内に平時居住した僧が稀少である。夢窓派は天竜寺周辺の嵯峨や相国寺内に多数の塔頭を有し、聖一派は東福寺を度弟院と化して他派を排除し、黄竜派は建仁寺を有力本拠とした。かくして、当該詩軸の作成を「一山の友社」の雅事として位置付けるのか、「五山の友社」の雅事とするのか、その判断が困難となるにいたる。

竺雲等連の序文と1詩は、第一段に二四行、一行一九字の見当で筆録されている。竺雲は「前南禅」として自署するが、嵯峨華藏院の塔主として序文を製している。一方、景南の跋文によると、「当代宗門司馬氏遷、繼談之筆削、鹿苑老師、序以冠其首」とある。竺雲は、司馬遷に比され、鹿苑院塔主として紹介されている。この間に鹿苑院僧録に任じたことが判明する。「史記」「漢書」に精通し、「漢書連」「連漢書」と

称揚されたことでも知られる。

2〜5詩が第二段に収載されるが、いずれも一詩を三行で筆録する。2〜4詩については、本文に二行（一行一四字）、自署に一行を費す。5詩の作者中孫にいたり、おそらく故意に字配りを変化させている。

2詩の自署は「玉泉橋北八十二齡愚極」である。愚極礼才が、当年八二歳であったことが明記されている。愚極の没年齢は、玉村竹二「五山禅僧伝記集成」では宝徳四年六月六日没・寿九〇歳とするが、自らの年齢を誤記するとは考え難い。筆録が宝徳三年であれば没年齢は八三歳、翌年であれば八四歳ということになる。序文の直後に配されること、3詩の場合（後述）をも勘案すると、前者であったと推定される。なお、景南の跋文には触れていないが、詩軸が完成するのは愚極の死後であったことが判明する。

3詩の作者は信仲明篤である。信仲詩は次のごとくである。

海嶠天長隔我群、音塵別後香無葢、春來飛尽北帰雁、
説與南征日暮雲、

承句の「香無聞」の表現からは、送行の直後ではなく、少しく時間が経過しているかに見える。後半部に注目すると、春が訪れて北帰の雁が南征日暮の下の雪岫の音信を伝えてくれることを期している。遠方の朋友を相慕う佳句として名高い、杜甫「春日憶李白」詩の「渭北春天樹、江東日暮雲」句に

扱った措辞である。秋季以降、あるいは眼前南下の雁に因んだ製作でもあろう。次いで、問題は製作の年時である。信仲の没年に関しては、『五山歴代』に「宝徳三年辛未十月朔日寂」とある（前記【五山神僧記】
【集感】も同様である。）。この記事に拠れば、3詩の製作と染筆は、宝徳三年の秋ということになる。最晩年、絶筆に近い作品であり、詩軸の完成を待つことなく死没している。因みに、2詩と3詩は、いずれも老齡・衰病を思わせない、よく似た几帳面な筆致である。

4詩の作者は心田清播であり、後半部に「留滞通知力家学、絳紗弟子对囊萤」とある。留滞中における家学の修得を励まし、「囊萤」を詠出する。夏から秋にかけての製作・染筆であろう。5詩は、主唱・仲介の労を執った、抱節中孫の作品である。後半部に「姓名我亦列篇次、顔汗桑間濮上詞」とするよう、諸老の詩作を称揚して謝意を表し、自己の作品を謙遜するのが特徴である。

6〜8詩の三詩は、第三段に筆録されている。6詩に三行、7詩に五行、8詩に四行が費され、変化に富む配置になっている。6詩の作者・東岳澄昕の出自は、一條経嗣の息男で、兼良の兄弟に相当する。起句「雪岫佳名尤可人」のように、詩が贈られる相手僧の名をそのまま詠み込むのが特徴である。詩の本文は一行一四字で写され、第二段の第一首・2詩の筆録法に準拠したものか。

瑞溪周鳳の7詩については、瑞溪『臥雲藁』にも458詩として収められる（【五山文学新集】
【第五卷所収】）。

458 招南国故人 南禅喝食、由良間（門）徒、寓紀州、

日暮天涯人未還、南朝古寺水雲間、鷲峰争似竜峰好、

元是吾皇御愛山、

とあり、詩本文についての異同は認められない。注目されるのは、『臥雲藁』では「招」型の題辞が付され、招人詩として収められている。紀伊国の興国寺に寓住する「南禅喝食」の雪岫のことを、「南国故人」として紹介する点にも留意される。「南国」といい、「故人」といい、意味する範囲は曖昧・広範である。詩の内容としては、山号を詠み込みながら、興国寺（峰）が南禅寺（道）に匹敵し、さらには南朝方の古刹で、天皇御愛の名利であることを強調している。興国寺は、南朝の勢力範囲内にあつたために、孤峰をはじめとして南朝方歴代天皇より帰依された。天子を詠出したために、染筆にあつては、軸全体の大略中央部に、本文を一行九字分として、他詩と比較して余裕のある字配りとし、しかも「吾皇御愛山」の五文字は改行の上で一行に筆録されている。なお、『臥雲藁』の458詩は、直前の457詩の題辞に「王府南荣棠侍者、辛未春、暫遊南国、（下略）」とあり、前後の作品配列を勘案する一時、辛未・宝徳三年の夏・秋の頃の製作であつたと推される。

東沼周殿の8詩については、東沼『流水集』にも収められる（『五山文学新集』）。
（第三卷所収）

招南紀雪岫俊少

天女騎竜度絳河、淚成微霰点秋波、祇応三十六橋水、
夜々声愁来暮歌、

とあり、詩本文についての異同は認め難い。ここでも「招」型の題辭が付され、招人詩として収められる。雪岫については「俊少」として表記される。集では当該詩に次いで三首隔て、「雲西大和尚寵弟曰是文殊鈍公、其人也、辛未之星夕、言詩、（下略）」題詩が配され、辛未・宝徳三年の七月七日・星夕後の製作であることが明記される。この点、雪岫を招じた詩の起句に注目すると、「天女」は織女星の一名でもあり、「絳河」は銀河・天の河をも指す。織姫の「騎竜」の故事が不分明であるが、8詩が同じく宝徳三年の七夕を契機の一つとした作詩である可能性は高い。

第四段には、9、12詩の四詩が筆録される。9、11詩はそれぞれ類似の字配りで三行を、12詩のみは四行を費やしている。菊碗の9詩では、転句「海山不礙南詢志」のように、雪岫を善財童子に比している。文溪の10詩では、承句「夏去秋来駕未帰」が注目される。秋季の製作であることが明白である。瑞巖の11詩では、転句「騷壇寂寞送君後」のごとく、雪岫を欠いた同社・友社の寂寞を強調している。起句の末字

「流」の筆録を忘失し、後に当該箇所を句点で示した上で、詩末に小字で補うのも特徴である。故意の所為か否かは不明である。存耕の12詩は、承句に「碧芙蓉」を詠出し、後半部を「炎霄類人相思夢、塵外清標雪一峯」とする。炎暑（残暑）の夜の夢中における雪岫の清姿を雪の峰に比している。岫には山・峰・頂などの意がある。

第五段には、13、16詩の四詩が筆録される。13、15詩には各三行、14、16詩には各四行が費されるが、それぞれの詩本文の字配りに法則性は見出し難い。なお、玉村氏「詩軸集成」における「雪岫朔公諸彦送行詩軸」では、この13、16詩の第五段がそのまま一括して、第一段の竺雲の序文と詩の直後に翻刻・位置されている。あえてこのように配された理由、あるいは原因については不明である。

華岳建胃の13詩については、雪岫の行を無何有の郷への仙遊に比し、結句に「欲逐南華鵬背翁」とする。師の伯巖を鵬背の南華老人・莊子に比するが、これは北の海（北冥）の鯤が化して鵬という名の鳥になり、この鵬が南の海（南冥）に移ろうとする際に、旋風に羽ばたいて九万里も上昇し、六箇月の後に到着して休息したとする故事を用いた措辞であると解する。老莊思想を反映している点が特徴である（『華岳題』）。九淵竜蹠の14詩は、前半部「黃鸝声老樹蒼々、悵望何堪炎夏長」とあり、夏季の製作であることを示す。その上で、転句「是歲南

州不知暑」として、雪岫の来訪により、当地が清涼であったとする。「是歳」は、雪岫が興国寺に下向したこの年・宝徳三年として理解するのが妥当であろう。

竹香全悟の15詩は次のごとくである。

去年邂逅近吾不、閑在江南久繫舟、安得穩風載飛夢、兼葭深处学双鷗、

注目すべきは、起句において「去年」の邂逅の記憶を問い掛け、承句において江南興国寺における留滞を「久繫舟」として表現し、転句において「秋風」を詠出することである。いまだ在洛中であった「去年」の意に解すると、「久」字の存在をも勘案され、竹香の詩の製作・染筆が享徳元年秋であったことになる。九淵の14詩と本15詩とは、季節的には連続するが、この間に一年間の空白が存したのではあるまいか。

希世靈彦の16詩については、希世「村庵藁」にも収められる（五山文学集）。

481 寄南紀雪岫上人

南国江山画不如、恐君到处久躊躇、秋涼一夜長安雨、

灯火幾家人讀書、

とあり、詩本文については異同は認められない。が、「寄」型の題辭が付され、寄人詩として収められている点に留意される。雪岫については、「上人」として表記される。次いで、希世「雪巢集」にも収められる（建仁寺阿）。「雪巢集」は、製作

年次の順に作品が配列されているのが特徴であり、16詩は享徳元年の作品群に収められる。因みに、「雪巢集」の作品と比較することにより、「村庵藁」においても457、485詩が享徳元年の作品であることが判明する。かくして、転句において秋涼の雨を詠出するが、その留滞を承句で「久躊躇」として表現することをも勘案すると、雪岫が離京した翌年の秋季であることになる。16詩は、15詩と同様に、享徳元年秋の製作・染筆であると解される。

最下段・第六段には、景南英文の跋文が、二四行を費して筆録される。竺雲の序文と比較すると、行数は同じであるが、景南の筆録は草書体に近く、一行の字数に変動が見られる。跋文の内容については、すでに適宜紹介した。享徳元年八月の製作・染筆であり、この時点で詩軸は完成する。なお、跋文では当年の景南の年齢を「暮齡八十八書焉」（前）と明記しており、享徳三年（一四五四）九月の没年齢としては九〇歳説が正しいことも判明する（八三歳説や八八）。

詩軸の構成について概観した。序文の筆録が宝徳三年五月であるのに対し、跋文については翌享徳元年八月であった。この間一年三箇月を費しているわけであるが、諸僧が寄せた詩作については夏季と秋季の製作が明白な作品は認められるが、春季・冬季を欠いているのが疑問であった。如上の検討により、軸上への筆録順が作品の制作順であったとすると、

同じく夏・秋の作品ながら、1-14詩までは宝徳三年度、15・16詩については翌享徳元年度の製作ではないかと推される。このように考えると、一年三箇月もの長い期間詩軸が各僧の間を転々としたというよりは、前年と翌年の夏・秋の一期間、抱節が予定された僧の間を集中的に訪れて依頼、完成したというのが実態ではあるまいか。なお、中間の冬・春季の空白が存在する理由については、雪岫の留滞が長期に及んだこと、景南が強固に辞退したことなど記述されているが、詳細は不明である。

【雪岫靈朔の存在意義—禪林文芸における少年僧】

詩軸が贈られる雪岫靈朔については、門派としての法灯派や、五山(寺)としての南禪寺内における存在や役割については触れたところである。本項では、「雪岫朔公諸彦送行詩軸」を企画・作成する機縁を提供した、雪岫靈朔という少年僧の禪林文芸における存在の実態や役割について検討したい。

「雪岫朔公諸彦送行詩軸」に筆録された作品は、それぞれの僧の作品集・別集の中には題辭が付された上で収載されたことであろう。その一端はすでに紹介した。それらの中で、希世の作品については、「中華若木詩抄」においても256詩として取り上げられ、解説が加えられる。抄物「中華若木詩抄」は、中国の詩人と本朝の禅僧の七言絶句詩を交互に配置している。総計二六〇編(一例の六一百)の中で、希世の詩は集中最多の二

三編を占める。256詩は、「寄南紀雪岫上人」の題辭を付し、詩軸や希世の別集の詩本文との間に異同は認め難い。編者・抄者と目される如月寿印は、256詩が詩軸の一編であるということには触れていない。詩題が一致することもあり、直接の収集源が希世の別集(「村庵壘」か)であった可能性は高い。が、「雪岫朔公諸彦送行詩軸」の存在、さらには雪岫靈朔少年の存在が、選詩されるに際して、何らかの要因として勘案されたことであろうと想像する。

「中華若木詩抄」は、幼童や少年僧を中心とする初学者が、作詩の法を学習する折の参考書としても利用されていた。幼童・少年僧の読者・利用者にとって、同世代、同境遇である雪岫のような存在を素材や対象にした詩作(「艶詩」)には、特別な関心が寄せられたことであろう。このことは同時に、編纂者にとって、艶詩の選択についてはよほど慎重に吟味されねばならなかったことを意味する。「中華若木詩抄」の116詩には、次の作品が取り上げられている。

116 送少年帰京 南江

海城羈客立斜暉、可忍春婦人亦帰、情得老鶯吟不徹、
残花泣淚兩小柴扉、

南江宗沆(二三七六一—四六三)が、帰洛する少年僧のために贈った送行詩である。南江は、別に漁庵・鷗巢と号し、初め臨濟宗一山派に属して活動するが、晩年、泉南(和泉國)の地を拠

として、例えば法灯派の禅穩居士などの外護により、半僧半俗の生活を送ったことが知られている（前掲「五山禪僧」）。京洛より地方に下向する少年僧のために製された作品が圧倒的に多い中であつて、作者自らも旅客（觀客）として、帰洛する少年僧のために製している点が特徴の一つである。次いで、この116詩には「少年」としか表記されていないが、南江「鷗巢贖藥」（国会図書館蔵）によると、次のような題辭が付されている。

泉南客舎、雪岫少年來、見需錢語、余口不言詩、殆廿年余、然少年之需、默拒匪人也、卒書一絶云、

とあり、116詩の「少年」は、具体的に「雪岫少年」として明記されている。南江は、送行詩（錢）を需められたのに対し、二十年余の沈黙を破つて応じている。雪岫については、それほどまでに寵愛されていたことを示す。なお、116詩の題辭に雪岫の名前が明記されなかつた理由については、収集に際して原詩の長文の題辭を簡潔に整えたこと、やがて256詩において明記されることなどが考えられる。後者に関しては、少年僧への送行詩や招寄詩は数多く存在することであり、それらの中から特定の少年僧への偏重・偏愛を話題として誘発することとは、集の編纂目的からは外れることであつた。いずれにしても、「中華若木詩抄」の編者にとつて、艶詩文芸の中における雪岫の存在と役割は、特別なものであつたことが想像される。

116詩に関しては、希世「村庵藁」に次詩が収められる。

雪岫從泉城還、出示漁庵錢行之作、余輒次韵奉呈

晨發泉南京夕暉、誰詩袖裏獨携歸、袈裟換得簑衣綠、

髮白漁庵水半扉、

泉南より上洛した雪岫は、南江（庵）の送行詩を示し、希世に唱和を需めている。「次韵」詩である点に注目すると、希世詩の韻脚「暉・歸・扉」は、116詩の韻脚と一致している。雪岫の示した本韻詩は116詩であり、これに唱和・次韻したのが本詩という訳である。転句において還俗のことを詠み、結句には別号「漁庵」を詠み込んでいる点にも注目される。次いで、本詩は、希世「雪巢集」では、雪岫↓雲岫の異同が存するが（恐らくは誤写）、「乙亥稿」の中に収められる。享徳四年（康正元年）（二四五）の製作であることが判明する。116詩の南江の題辭における親近の口吻から推し、この直前の相当の期間、雪岫は泉南の地に滞在したことになる。南江「漁庵小藁」には、「謝雪岫少年惠墨」と題された詩も存する。

雪岫靈朔は、享徳元年八月に「雪岫朔公諸彦送行詩軸」が完成した直後に帰洛したのではないかと想像するが、やがてまもなく和泉国に下向したことが知られる。同国には、孤峰覚明が開山した大雄寺が在り、南江「鷗巢贖藥」には「大雄寺寓住之作」と総題される三八首が収載されている。雪岫は、師・伯巖の各地への転住に随侍することが主目的であつたと

推されるが、京洛の南禅寺と、由良興国寺・和泉大雄寺をはじめとする法灯派の諸寺との間を、適度の期間の留滞・寓住を重ねながら、往復したようである。そしてその都度、雪岫が「美少」「美文」であつたが故に、送行詩や招寄詩をはじめとする艶詩の素材・対象として寵愛されている。幼童や少年僧を素材・対象とした艶詩は、禅林の文芸の中で特異な位置を占める。宗旨や宗門活動の観点からは、幼童・少年僧の寵愛から生まれる艶詩の存在は、外道の文芸である。が、実際には、およそ華美や美麗から縁遠い男社会の禅林においては、時代が降るにつれて密かに流行し、いわば「秘められた文芸」として特定の地歩を占めるに至る。有髪の喝食や雑髪直後の少年僧は、師僧によつて美々しく装われ、衆僧の注目を浴びながら、艶詩を製する機縁を提供していたのである。ただし、

適齢の時期、高い門地、さらには秀でた容姿等が要求され、該当者は稀少であつた。ある時期、しかも数年といった短い期間内において喧伝される喝食や少年僧は限定される。その限られた喝食や少年僧を、塔頭・本寺、さらには五山・禅林があげて後援し、詩会を開催する、あるいは詩軸を完成するなど試みている。「代作」という便法が普及するものの、直接の作者として関与することはほとんど無い。にもかかわらず、喝食や少年僧が禅林文芸に占めた存在と役割は大きく、その意義は再認識される必要があることが判明しよう。

雪岫靈朔こそは、当代を代表する喝食・少年僧の一人として、禅林の文壇に迎えられ、詩文を製する契機を提供した、希有の存在であつたと言えよう。